

第1次世界大戦期イランにおける 民族防衛委員会の活動について

吉井 武史

序 論

民族防衛委員会（Komite^h-ye Defa[']-e Melli：以下KDMと略記）とは、第1次世界大戦下のイランにおいて、協商国側支持を宣明していたテヘラーンのカージャール朝宮廷に対抗する形で、中欧同盟国側の支持によって成立した政権のことを言う。第1次世界大戦期のイランを対象とする中でKDMに言及したいくつかの研究書を総合すると、KDMに対する評価は以下の二つの説に大別される。

すなわち、G. デュクロック、D. ミクシュ、M. ナハイ、U. ゲールケ、G. レンチョフスキー等の欧米人研究者は、いずれもKDMを単なる中欧同盟国の傀儡政権と見做す^①のに対し、加賀谷寛氏はKDMを立憲革命と第1次大戦直後の民族運動昂揚期の橋渡し役として積極的に評価している^②。しかし、いずれの場合も明確な論拠が示されているわけではなく、KDMの歴史的意義に関する論議はほとんどなされていないに等しい。

そこで本稿では、KDMの設立から滅亡までの過程を、

- ①設 立 期（1915年11月—12月）
- ②第1次政権期（1915年12月—1916年5月）
- ③第2次政権期（1916年7月—1917年3月）

に区分したうえで、各時期におけるKDMの性格を考察し、その性格の時期的変化に焦点を当ててみることにした。

1. 第1次世界大戦勃発時のイラン

1914年7月28日に勃発した第1次世界大戦は、当初は戦場が欧州に限定されていたため、カージャール朝イラン帝国にとっては対岸の火事にすぎないと思われていた。ところが、10月30日、ロシア帝国によるオスマントルコ帝国に対する宣戦布告によって、俄然、イランが大戦に巻き込まれる可能性が生じて来たため、当時17歳の皇帝アフマド＝シャー（Solţān Aḥmad Shāh）は厳正中立宣言を発した。しかし、結局、イランはイギリス・ロシア・トルコの各

国軍が攻防する戦場と化してしまい、さらにドイツのカイザー・ヴィルヘルム 2 世はイスラム世界における「革命の促進」(Revolutionierung)の一環として、イランを中欧同盟国側に立って参戦させるべく、積極的な政治工作を開始したのである。^③

一方、イラン国内では、1911年にロシア軍の介入とイギリスの黙認によって、第2次国民議会(Majles-e Dovvom)が解散させられ、立憲革命(Enqelāb-e Mashrūte^h)が挫折してから、一旦沈黙を強いられていた反英・反露感情に基づく民族主義運動が、大戦勃発とともに再び昂揚していた。そして、このような状況下で、1915年1月4日、第3次国民議会(Majles-e Sevvom)が開会されるに至ったのである。この議会は、従来から反英・反露感情の強かった人民民主党(Ferqeh-ye Demokrāt-e ‘Ammyyūn)と、従来、英露両国への協力姿勢の強かった公正社会党(Ferqeh-ye Ejtemā’i-ye E’tedālyyān)の二大会派に分かれていたが、公正社会党所属議員の中にも反英露感情をもつ者が少なくなく、イランの各種新聞も大半が反協商国の傾向を強めていた。^④

このような中、1915年11月、バラトフ(Баратов)將軍麾下のロシア軍のテヘラーン侵攻直前に、駐イラン・ドイツ大使ロイス侯(Heinrich XXXI Prinz von Reuss)と大使館付武官カニッツ伯(Graf von Kanitz)は、親独派のスウェーデン人将校団配下のジャンダルメリー(Jhändärmeri)を中核とする親独派勢力によるクーデタを執行して一挙にイランの参戦を実現させようと企てた。かくて、一時は皇帝アフマッド=シャーもドイツの説得に応じてエスファハーンへの遷都に同意するに至り、国民議会議員を中心とする反英・反露勢力は大挙して、エスファハーンへの途上にある聖地コムへ向かった。しかし、結局、アフマッド=シャーは英露両国大使の恫喝に屈して遷都断念と協商国側支持を宣明してしまい、公正社会党最高指導者のセパフサーラーレ=アアザム(Moḥammad Vali Khān Sepahsālār-e A‘zam)元首相やファルマーン=ファルマー(‘Abd al-Hoseyn Mirzā b. Firūz Farmān Farmā)内相等は、積極的に英露両国に協力する道を選んだ。^⑤

しかし、決してこれによってイランの民族主義グループの反英露活動やドイツの工作が終焉したわけではなかったのである。

2. 民族防衛委員会の設立

アフマッド=シャーがテヘラーン脱出を断念し、協商国支持を宣明したニュースが伝わると、コムへ脱出していた国民議会議員を中心とするモハーージェラート(Mohājerāt: 離脱者の意)は、対応に苦慮することになったが、結局、その大半はドイツの協力を得て、ロシア軍を相手に徹底抗戦を貫く覚悟を

固め、11月20日、KDMが結成されることとなった。これには、立憲革命の際に活躍した民族主義活動家のほか、ジャンダルメリー部隊の大半も合流していたが、22日になって、以下の4人の代表が選出された。

〔1〕ソレイマーン＝ミールザー (Soleymān Mīrzā Eskandari)^⑫ 人民民主党代表。

〔2〕タバータバーイー (Mīrzā Moḥammad Ṣadeq Tabāṭabā'ī)^⑬ 公正社会党多数派代表。

〔3〕モダッレス (Seyyed Ḥasan Modarres)^⑭ 公正社会党少数派代表。

〔4〕ネザーモッ＝サルタネ (Rezā Qolī Khān Neẓām al-Saltāne^h Māfi)^⑮ ロレスターン州知事。

以上の4人のうち、ネザーモッ＝サルタネなる人物は、従来、革命や民族運動とはまったく無縁であった軍閥の有力者であり、その莫大な資金力と軍事力に着目したカニツ伯が数カ月前から接触していた相手であった^⑯。しかし、この段階でのKDMの主導権は、人民民主党を中心とする民族主義活動家達の手中にあったと考えられる。

また、元来、親英露色の強かった公正社会党がセパフサーラーレーアアザムやファルマーン＝ファルマー等の最高実力者の脱落があったものの、KDMに参加したことは、KDM支持層の基盤の広さを物語っていると言うこともできるが、実はその陰では、ドイツと公正社会党との間で、つぎのように要約される密約が調印されていたのである。^⑰

〔1〕ドイツ政府は、公正社会党に対し、全地域において、武器と軍需品を供給する。

〔2〕ドイツ政府は、公正社会党を同盟者として遇するように、全地域のドイツ将校に指令する。

〔3〕ドイツ政府は、公正社会党指導者に対し、その党活動と宣伝活動に必要な金額を供給する。

〔4〕ドイツ政府は、公正社会党指導者の生命・財産を保護する。

この密約から明らかなように、公正社会党は、ドイツに協力すると言うよりも、むしろ全面的に依存するかたちで、KDMに参加したと言えよう。

しかし、いずれにせよ、従来、英露両国によるイラン支配に迎合する傾向の強かった公正社会党ですら、親独路線に転ぜざるを得ない程、当時のイランにおける反英・反露感情に基づくナショナリズムは昂揚をみせていたわけであり、この段階でのKDMは、明らかに「民族防衛」のための真摯な熱情を具現した組織であったと言い得る。もちろん、この際、「ナショナリズム」の語を

どう定義するかが、ポイントになるわけだが、これはイラン近代史全体にわたる大問題であり、今後の課題としたい。

なお、テヘラーン政府のモストウフィヨール＝ママーレク (Mirzā Ḥasan Khān Mostoufī al-Mamālek) 首相は、モハーージェラートとロイス侯をテヘラーンに呼び戻すべく、ゾロアスター教徒のケイホスロー (Arbāb Keykhosrou) なる人物をコムに派遣して説得に当たさせたが、結局、徒勞に終わっている。

一方、この間にもカニッツ伯は、ロシア軍の攻撃に備えての防衛線を構築していた。すなわち、ハマダーンを防衛拠点として、タキー＝ハーン (Moḥammad Taqī Khān Tabrīzi) 麾下のジャンダルメリ一部隊を配置し、キャンガーヴァル (Kangāvar) にはスウェーデン人将校麾下のジャンダルメリ一部隊を派遣して要塞化させ、さらにソレイマーン＝ハーン (Mirzā Soleymān Khān) が率いる部隊をサーヴェ (Sāveh) からロバートキャリム (Robāt Karīm) に進出させて迎撃態勢を整えていたのである。また、コム²³のウラマーも KDM 支持を明らかにしていた。

このほか、「暗殺者教団」として名高いニザール派の後継者アーガー＝ハーン 3 世 (Āghā Khān Sevvom) の従兄弟にあたるファロッフ＝シャー (Āghā Farrokh Shāh) を殺し屋として雇い入れ、親英派の巨頭たるテヘラーンのファルマーン＝ファルマー内相を暗殺する計画も立てられたが、これは事前に発覚して失敗した。

このように、KDM はイラン西部における実効支配を確立したかに見えたが、貧弱な装備と寄せ集めの兵士しかもたない KDM 軍は、所詮、ロシア正規軍の敵ではなく、ひとたびバラトフ將軍が攻勢を開始するや、たちまちにして 12 月 17 日にはハマダーンが、21 日にはコムが陥落してしまった。

なお、ロイス侯は 12 月 21 日付で、公式には「病氣」を理由にイラン駐在大使の任を解かれ、後任としてファッセル博士 (Dr. Vassel) が発令されたが、彼は結局、テヘラーンに赴任することができなかった。

またテヘラーンにおいては、12 月 25 日、モストウフィヨール＝ママーレク内閣が更迭されて、ファルマーン＝ファルマー内閣が成立し、カージャール朝政府の協商国支持の姿勢は一段と鮮明になった。

このような新局面を迎えて、KDM はその態勢立て直しを迫られることとなったのである。

3. 第 1 次政権期の状況

コムから、ネザーモッ＝サルタネの本拠地であるボルージェルド (Borūje-rd) へ敗走して来た KDM は、この地において、「国民政府」(Hokūmat-e

Melli) を樹立することになり、KDM内の各勢力の代表から成る「10人委員会」と称される政策決定機関が設立された。そのメンバーは以下の通りである。

- 委員長 ネザーモッ=サルタネ
- 司法委員 タバータバーイー
- 内務委員 ソレイマーン=ミールザー
- 財務委員 モハンマド=アリー=ハーン (Mirzā Moḥammad ‘Alī Khān Farzīn)
- 外務委員 モハンマド=アリー (Moḥammad ‘Alī Māfi)
- 教育委員 モダッレス
- 商業・公共事業委員 スーレ=エスラーフィール (Mirzā Qāsem Khān Şūr-e Esrāfil)

また、1915年12月26日には、カニッツ伯とネザーモッ=サルタネとの間で、つぎのような条約が締結された。

カニッツ伯は、ドイツ帝国の全権代表として、その政府の名において、ネザーモッ=サルタネ閣下との間に以下の協定に調印するものである。

第1条 ネザーモッ=サルタネ閣下は、ペルシア解放のための国民運動を指導し、(大戦の)全面講和に至るまで、あるいは少なくとも、ペルシア政府がその完全な中立と独立を回復しない限りにおいて英露両国に対する戦争を続けるため、あらゆる影響力とあらゆる手段を行使するものである。

第2条 ドイツ政府は、戦争終結に至るまで、全ペルシア国民軍及びペルシアにおいて英露両国に対して行動しているすべてのドイツ・トルコ部隊——アゼルバイジャン方面のものは除く——の指揮権をネザーモッ=サルタネ閣下に委ねることを保証するものである。

第3条 ネザーモッ=サルタネ閣下は、フォン=デア=ゴルツ (Colmar Freiherr von der Goltz) 元帥閣下、若しくはその後任者によって与えられた指令に従う用意があることを明確に表明するものである。

第4条 ドイツ政府は、参謀本部 (état-major général) を構成する将校団 (の人選) をネザーモッ=サルタネ閣下に一任するものである。参謀本部は、ネザーモッ=サルタネ閣下の承認を経た後、作戦行動計画を実行するものとする。ネザーモッ=サルタネ閣下と参謀本部が、対立した場合は、その解決のために、ネザーモッ=サルタネ閣下、ドイツ大使館付陸軍武官 (カニッツ伯)、ドイツ軍参謀長及びネザーモッ=サルタネ閣下によって指名された人物1名から成る委員会が、設立されるものとする。

第5条 ドイツ政府は、戦争に必要な武器・弾薬（の扱い）をネザーモッーサルタネ閣下に一任し、トルコ・ドイツの援軍をペルシアに派遣するように留意するものである。これらの武器、弾薬及び軍隊は可及的速やかに供給（派遣）が開始されるものとする。

第6条 ドイツ政府は、テヘラーン駐在ドイツ大使館及び場合によっては、この目的のために特派される者の意のままになる資金によって、戦争から生じる必要経費をできる限り支払うものとする。ネザーモッーサルタネ閣下は、同様の目的の下に、実現可能な全方策を用いて、国民から（資金を）取り立てるものとする。

第7条 ドイツ政府は、ネザーモッーサルタネ閣下の個人的、政治的経費のため、毎月2万トマーン（8万マルク）を支払うものとする。

第8条 ネザーモッーサルタネ閣下が、戦争のために使用した費用は、できる限り、ペルシア（政府）によって償還される有期借款に変更されるものとする。

第9条 ネザーモッーサルタネ閣下は、いかなる場合においても、1916年1月14日までに、4,000人の軍勢[㊦]を招集することを約束するものとする。もし、2ヵ月間、ケルマーンシャー、クルディスタンおよび、キャンガーヴァル要塞を支えることができたならば、閣下は、収穫期までにさらに6,000の軍勢を招集することとする。

第10条 ドイツ政府は、ネザーモッーサルタネ閣下とその財産及びその一族を、戦争終結後15年間に渡って、あらゆる法的、外交的手段を行使して保護するものとする。

第11条 ネザーモッーサルタネ閣下が、戦争期間中に、閣下の政府の信任を失った時には、ドイツ政府は、いかなる場合においても閣下の身柄を保護し、また、戦争の結果がドイツにとって有利なものとなるにせよ、不利なものとなるにせよ、閣下の所有するあらゆる動産及び不動産並びに資金の所有権を保護するものとする。

第12条 ネザーモッーサルタネ閣下が逝去された場合には、ドイツ政府は、閣下の相続人に対して、第10条および第11条の規定を履行するものとする。

以上の条約から明察される国民政府の性格のうち、まず第一に注目すべき点は、第2条・第4条等の規定によって、ネザーモッーサルタネが独裁の権力を掌握しており、「10人委員会」の各メンバーは単なる並び大名にすぎないことが示されていることにある。しかも、第7条および第10～12条等には、ネザーモッーサルタネの個人的利益保護条項が多々盛り込まれており、KDMを中核

とする新政権は、完全にネザーモッーサルタネの個人的所有物のごとき様相を呈している。自分が失脚したり死亡したりした際の利益保護規定までも、国家間の条約に明記している点は、当時のイラン人の「国家」意識の一端を示すものとして興味深い。

また、第9条は、ドイツがネザーモッーサルタネ 支配下の 軍勢力を当てにし、そのために彼を 国民政府の 首班の 地位に就けたことを明白に物語っている。独自の軍勢力をもたない人民民主党や公正社会党は、ロシア軍との交戦下という状況においては、もはやKDMの主導権を握り得なかった。そして、国民政府の独裁者たるネザーモッーサルタネは、第3条によってドイツの將軍の指揮に服することになっているわけであるから、条約文よりみる限り、この新政権はドイツの支配下に入っていたと言うよりほかあるまい。ところが、デュクロックによれば、ネザーモッーサルタネなる男は、「注目すべき陰謀精神」(un esprit d'intrigue remarquable)の持ち主であり、ドイツと結託する一方で、テヘラーン政府のフェルマーン-フェルマー首相とも接触を続けるなど、ドイツにとっても全く油断のならない人物であった。このような男に実権を奪われることによって、KDMは当初の真摯なナショナリスティックな性格を大幅に減じてしまい、一野心家と外国勢力が結託した買弁の組織に近づくことになってしまったのである。

このほか、第8条の規定は、将来ドイツが英露両国に代ってイランを経済的に支配するための導火線となる性格を有するものであると言えよう。ただし、ドイツ本国政府は、この条約が一介の大使館付武官に過ぎないカニッツ伯によって締結されたものであるため、その有効性を疑問視していた。

なお、第2条において、アゼルバイジャン地方がKDMの管轄外に置かれていることは看過できない問題点である。すなわち、この地方は、オスマン帝国が汎トルコ主義に基づいて併合を主張している地域であり、KDMが同地方のトルコへの割譲を是認したとも考え得るからである。この問題に関しては、後考を俟ちたい。

さて、ではつぎに、国民政府のその後の変遷を追ってみよう。

ロシア軍による猛追撃は、その後も続き、12月27日には、ロバートキャリーム、アサダーバード(Asadābād)、カーシャーン(Kashān)が一挙に陥落する事態になったため、国民政府はケルマーンシャーへ移動することになった。

一方、ネザーモッーサルタネは、カニッツ伯との約束どおり、その資金力に物を言わせて4~5,000人の 剽悍な遊牧部族を近傍から駆り集めることに成功し、さらに、フォン=デア=ゴルトズ元帥はボップ(Bopp)大佐以下30人のドイツ将校団とトルコの砲兵3個大隊(約千人)を増援部隊としてキャンガーヴァ

ルへ送った。⁴⁷

かくして、1916年1月15日、キャンガーヴァル前面の峠において、国民政府軍とロシア軍との決戦が行なわれたが、ロシア軍の機関銃攻撃の前に、国民政府軍の遊牧民達は瞬時に潰走してしまい、翌日、キャンガーヴァルは陥落した。そして、カニツ伯³⁸は敗戦の責任を取って、遺書を残したまま行方不明となってしまったのである。

この頃、ケルマーンシャーを訪問してネザーモッ=サルタネと会見したフォン=デア=ゴルトツ元帥は失望のあまり、つぎのように語ったと言われている。³⁹

「ペルシアは無政府状態である。なにもなされはしない。塵埃と貪欲と臆病があるだけだ。莫大な支出は戻りはしない。」

このように、国民政府の軍事力は極めて脆弱で、到底ドイツの期待に応えられるものではなかった。そして、この間にも、ロシア軍は1月23日にソルタナーバード (Solṭanābād)⁴⁰ を攻略している。その後、一旦、トルコ軍の反撃によって、キャンガーヴァルやアサダーバード等が奪回されたものの、ロシア軍が反攻に転ずるや、たちまちにしてキャンガーヴァルとアサダーバードはもとより、2月26日には国民政府の所在地ケルマーンシャーまでが攻略されてしまった。⁴²

この結果、国民政府はトルコ国境に接するカスレシーリーン (Qaşr-e Shīrīn) に本拠を移したが、ネザーモッ=サルタネ配下の遊牧民の中には反逆するものも出る始末で、もはや国民政府の軍事力は壊滅状態にあった。⁴³

なお、3月6日には、テヘラーンにおいて、親英派のファルマーン=ファルマーン首相が更迭されて、親露派のセパフサーラー=アアザム元首相が第3次内閣を組閣し、カージャー朝政府は、ますますロシアの傀儡政権的性格を強めていた。

こうして、イランにおけるロシアの勢力は圧倒的なものとなり、バラトフ將軍は3月12日にケレンド (Kerend) を、3月20日にはエスファハーンを攻略したのみならず、4月18日にはキャンガーヴァル近郊でソレイマーン=ミールザーやソレイマーン=ハーン等を逮捕することに成功している。⁴⁴ ソレイマーン=ミールザーは、のちにイギリス軍に身柄を引き渡され、インドの監獄に送られた。⁴⁵

そしてついに、5月6日、ネザーモッ=サルタネやドイツ将校団は、カスレシーリーンを放棄してバグダードへ向い、5月9日、ロシア軍はカスレシーリーンに入城した。⁴⁶

かくして、国民政府はイランの国土から完全に駆逐されてしまったわけであるが、決してこれでKDMの命脈が尽きたわけではなかったのである。

4. 第2次政権の状況

1916年4月29日、数カ月に及ぶメソポタミアのクートルアマラ (Kūt al-Amara^h) 攻防戦の末、タウンジェント (Sir Charles Vere Ferrers Townshend) 少将麾下のイギリス軍は、トルコ軍に降伏し、また、カスレシーリン攻略後、トルコ領内に侵攻して来たロシア軍も、5月21日のハーナキーン (Khānaqīn) 攻防戦で敗れ去った。^④ 一方、ヨーロッパ戦線においては、ヴェルダン要塞攻防戦がドイツ軍の優勢裏に展開中であつたのみならず、東部戦線におけるロシア軍の攻勢が失敗に終わり、さらにオーストリア-ハンガリー軍によるイタリア戦線での攻勢が成功するなど、当時、中欧同盟国の意気は大いに高揚していた。

このような新情勢を受けて、オスマン帝国陸軍大臣エンヴェル=パシャ自らがバグダードへ乗り込んで、イラン・メソポタミア方面における中欧同盟国軍の再編を断行することになり、4月19日に病没していたフォン=デア=ゴルト元帥の跡を襲って、ハリル=パシャ (Halil Paşa) がメソポタミア方面軍最高司令官に就任した。つまり、この方面における中欧同盟国軍の主導権は完全にトルコ軍に移ることとなったのである。なお、同方面のドイツ軍指令官には、グレスマン (Gressman) 将軍が任命された。

かくして、同年6月末、アリー=イフサン=ベイ (Ali İhsân Bey) 麾下のトルコ第13軍は、ドイツの砲兵隊・機関銃支隊・通信部隊の支援の下に、イラン方面への大反攻を開始した。この作戦には、もちろん、ジャンダルメリーの残党を中心とするネザーモッ=サルタネ軍も参加し、タキー=ハーンが軍事面での責任者となった。そして、7月1日、トルコ軍はケルマーンシャーを奪回することに成功したのである。^④

この結果、ネザーモッ=サルタネは、再びケルマーンシャーに戻り、陣容を新たに「自由政府」(Doulat-e Āzād) を樹立し、以下の閣僚を任命した。^④ なお、☆印は「10人委員会」からの留任者、★印は横滑りを意味する。

- ☆ 自由政府首班 (Ra'īs-e Doulat-e Āzād) ネザーモッ=サルタネ
- ☆ 外務大臣 (Vazīr-e Omūr-e Khāreje^h) モハンマド=アリー
 - 軍事(司令官)代理 (Kafil-e Qovā-ye Nezāmi) サラーレ=ラシガル (Sālār-e Lashgar)^④
- ☆ 財務大臣 (Vazīr-e Mālyye^h) モハンマド=アリー=ハーン
 - 内務大臣 (Vazīr-e Dākhele^h) アディーボッ=サルタネ (Adīb al-Salṭane^h Samī'i)
- ★ 司法・ヴァークーフ大臣 (Vazīr-e 'Adlyye^h o Ouqāf) モダッレス

- ★ 郵政・電信大臣 (Vazir-e Post o Telegrāf) スーレ=エスラーフィール
○ 収入役 (Khazānedār) エッヅル=ママーレク (Hāj Ezz al-Mamālek
Ardelān)⁽⁶³⁾

この閣僚名簿から明らかなことは、ネザーモッ=サルタネの独裁体制が一段と強化されたという点である。すなわち、彼の身内の者が二人も入閣したのみならず、他の閣僚は軽量級の人物ばかりであり、「10人委員会」メンバーであったソレイマーン=ミールザー(彼は協商国軍の捕虜となっていたのであるから当然であるが)やタバータバーイー等の大物は姿を消している。

なお、中欧同盟国はこの「自由政府」を唯一正当なイラン政府として承認し、従来ベルリンにおいて中近東政策の立案に当たっていたルードルフ=ナドルニ (Rudolf Nadolny) 自身が、「イラン駐在ドイツ代理大使」としてケルマーンシャーに乗り込んで来た。⁽⁶⁴⁾

一方、トルコ軍の猛反攻はさらに続き、8月9日にはサフネ (Sahne^h) を、11日にはハマダーンを攻略して、一挙に帝都テヘラーンに迫る勢いを見せた。⁽⁶⁵⁾ なお、この間、敗走するロシア軍は略奪暴行の限りを尽くしたと言われる。

この新情勢を受けて、テヘラーンのカージャー朝宮廷では動揺が広がり、8月29日には親露派のセパフサーラーレ=アアザム内閣が瓦解して、比較的中立色の強いヴォス=コック=ドウレ (Hasan Vosūq al-Doule^h) が首相兼外相に就任し、公正社会党員を含む内閣を組閣した。また、テヘラーンに残留していた人民民主党員の活動も活発化して来た。⁽⁶⁶⁾

トルコ軍は結局、テヘラーン攻略こそ果たせなかったものの、以後半年以上にわたって、イラン西部の占領を続け、その占領地域がすなわち「自由政府」の統治地域となったわけであるが、この頃、ドイツとトルコの対イラン政策面での亀裂がますます拡大しつつあった。と言うのは、ナドルニがイラン人のナショナリズムを鼓舞することによって反英露闘争に駆り立てようとしたのに対し、トルコの武官フェヴズイ=ベイ (Fevzi Bey) は大々的に汎トルコ主義宣伝、すなわちイラン西部地方のオスマン帝国への併合を唱えて、人民民主党員を中心とするイラン人ナショナリストの嚮嚮を買っていたのである。この両者の対立は、独土両国の全く根本的な思惑の相違に由来する深刻なものであったが、ナドルニの気転と忍耐とによって辛うじて決裂が避けられていたのであった。⁽⁶⁷⁾ なお、ドイツとトルコとの対イラン政策上の対立を調停し得る可能性のあった国として、オーストリア=ハンガリー帝国の存在を見落とすわけにはいかないが、同国の対イラン政策に関しては、他日を期したい。

このような中、1917年が明けると、イランにおける情勢は、しだいに中欧同

盟国軍に不利になって来た。すなわち、メソポタミア戦線では、イギリス軍の反攻が開始されて、2月24日にはクートルアマラが攻略され、イランのトルコ軍が後方との連絡を断たれる危険性が生じて来た。しかも、イラン駐留トルコ軍の間では悪疫が流行しており、また北方からは、アルメニア人の遊撃隊が、伸びきったトルコ軍の兵站線を脅かしていたのである。

こうした情勢を受けて、ついにバラトフ將軍麾下のロシア軍は2月末に大攻勢の火蓋を切り、3月2日にはハマダーンを、5日にはキャンガーヴァルを、14日にはケルマーンシャーを、31日にはカスレシーリーンを一気に攻略して、イラン領内から中欧同盟国軍を完全に撃退してしまった。ただし、この間、ロシア本国では、3月11日に2月革命が勃発したため、ロシア軍のメソポタミア再侵攻は不徹底に終わった。また、イギリス軍も3月11日、バグダード攻略に成功している。

なお、C. サイクスによれば、「自由政府」に参加していた人民民主黨員達は、現地遊牧部族と共に、敗走途中のトルコ軍を襲撃して、略奪暴行を働いたとされるが、これは従来、汎トルコ主義宣伝に対して隠忍自重していたイラン人ナショナリストの怒りが爆発した結果と考えられる。ただし、人民民主党の中でも、モサーヴァート (Moḥammad Rezā Mosāvāt) の一派は、アゼルバイジャン地方のオスマン帝国への割譲に積極的に賛成していた。

かくして、KDM を中核とする「自由政府」はイラン領内から駆逐されてしまい、トルコ領内のキルクーク (Kirkūk) へ本拠を移し、さらに4月にはモスール (Mosūl) に移動したが、もはや、実効支配する領土を持たない亡命政権にすぎないことは明らかであった。そして、5月7日には、「イラン駐在ドイツ大使館」も廃止されて、ナドルニ大使はベルリンへ戻り、KDMおよび「自由政府」は消滅してしまったのである。

結 論

以上、KDM の活動を、設立期・第1次政権期・第2次政権期の三つの時期に区分して概観して来たが、ここで改めてそれぞれの時期の特徴を挙げてみることにしたい。

まず、設立期のKDMは、その代表メンバーからして、立憲革命期以来の民族主義活動家が主導権を握っていたことが明らかであり、また、公正社会党を含む第3次国民議会代議士の大半がKDMに参加したという点から見ても、純粋な反英露感情に基づくイラン民族運動の一つの頂点を成すものであったと言っても過言ではなかろう。さらに、その設立事情も、ドイツの工作があったにせよ、皇帝アフマッド・シャーの遷都宣言に端を発したイラン人の主体的反英

露行動としての色彩が強く、決してドイツの全面的イニシアティブによって作り上げられたものではなかった。

ところが、第1次政権期に入ると、ロシア軍の猛攻を防ぐための軍事力が最大のポイントとなり、その結果、軍閥的有力者であったネザーモッ＝サルタネが完全に KDM を牛耳ってしまうことになった。しかも、ネザーモッ＝サルタネは、ドイツとの間で個人的利益保護規定を含む条約を締結し、積極的にドイツの協力者となる道を選んだのだ。その意味で、KDM はドイツの傀儡にすぎなくなってしまうということも可能ではある。しかしながら、この段階では KDM の軍事力は、ネザーモッ＝サルタネ 支配下の遊牧民やジャンダルメリ一部隊（将校の大半はスウェーデン人だが、下士官兵はイラン人）が主体となっており、民族主義運動としての色彩が薄まったとは言え、KDM は、イラン人によって構成された政権であったと言う点だけは確かである。

だが、第2次政権期になると、KDM は、多少独自の軍事力を有していたとは言え、トルコの大軍の中にあつては、そのようなものは取るに足りぬ存在であり、完全に中欧同盟国軍に寄生した傀儡政権に墮してしまつたと言えよう。しかも、政権指導部からは、大物の民族運動活動家が姿を消し、ネザーモッ＝サルタネの一族が重要なポストを占めるに至っており、到底イラン国民を代表するとは言い難い買弁政府になり果ててしまつたのである。ところが皮肉にも、この第2次政権期は、国際法上の「国家」としての形式が一番整っていた時期でもあつた。すなわち、内閣が構成されたのみならず、中欧同盟国からは唯一正当なイラン政府として公式に承認され、「首都」たるケルマーンシャーにはドイツの大使館が設置されたわけである。しかし、このような形式的虚飾とその実態が、必ずしも比例するものではないことは改めて言うまでもなからう。

以上のように、KDM は、時期を追うに従つて、形式的には政府としての形態を整えていく一方、実質的にはますます傀儡化の道を辿つていっており、三つの時期によってその性格は大きく異なつていたのである。

また、KDM 参加者の中には、世界大戦末期から、レザー＝シャー政権期にかけて活躍することになる人物が含まれており、この点からしても、KDM がイラン近代史上に果たした役割は小さくない。KDM 消滅後の参加者の活動をフォローすることも今後の課題である。

つぎに、KDM とカージャール朝政府との関係を取り上げてみたい。ネザーモッ＝サルタネは、カージャール朝宮廷とも連絡を取り合つていたとされるが、これは彼の自己保身のためであると考えて間違いない。しかし、結果的に見た場合、カージャール朝政府が協商国を支持し、KDM が中欧同盟国を支持

することによって、世界大戦にいずれの陣営が勝利を収めても、「イラン政府」は存続できることになったわけである。実際には、協商国の勝利によって、カージャーール王朝による支配が維持されたわけだが、もし中欧同盟国側が勝利していた場合でも、KDM を中核とする政権によってイランの独立は一応守られていたはずである。その意味で、ネザーモッサーサルタネは結果的に、イランにとって有意義な役割を果たした人物であったとすることもできよう。

最後に、KDM の歴史的意義を要約すれば以下ようになる。

すなわち、KDM は本来イラン民族主義運動の一環として結成されながら、最終的にはドイツの傀儡政権と化してしまった。つまり、KDM は半植民地体制下にある国家における民族運動の困難さを示す一例として、興味深い存在であったのである。

〔追記〕

本稿は昭和61年1月提出の修士論文の一部を加筆・修正したものである。また、本稿執筆に当たり、全般的な指導をしてくださった藤本勝次先生および、貴重な文献を貸与してくださったのみならず、かずかずのご助言をいただいた岡崎正孝先生に対し、末尾ながら厚く御礼申し上げたい。また、文献収集に際して絶大なご協力をいただいた中田考氏（東京大学大学院）と松田幸平氏（大阪外国語大学大学院）にも合わせて深く感謝の意を表したい。

註

- ① George Ducroq, "Les Allmands en Perse," *Revue du monde musulman*, 54 (1923), PP. 183-188.

Dagobert von Mikusch, *Wassmuss: der Deutsch Lawrence* (Leipzig: [], 1937), (邦訳、『独英イラン争覇記』, 村松正俊他訳, 泰山房, 1940. pp. 177-282.) 原書は未入手。

M. Nakhai, *L'Evolution politique de l'Iran* (Bruxelles: Éditions J. Felix, 1938), PP. 77-88.

Ulrich Gehrke, "Persian in der deutschen Orientpolitik währen des ersten Weltkrieges", Diss. Hamburg 1960, I, 230ff.

George Lenczowski, "Foreign Powers' Intervention in Iran during World War I", in *Qajar Iran: Political, Social and Cultural Change 1800-1925*, ed. Edmand Bosworth and Carole Hillenbrand (Edinburgh: Edinburgh Univ. Press, 1983), PP. 81-85.

- ② 加賀谷寛, 『イラン現代史』近藤出版社, 1975. PP. 65-71.
③ Fritz Fischer, *Griff nach der Weltmacht: Die Kriegszielpolitik des kaiserlichen Deutschland 1914/18* (1967; rpt. Düsseldorf: Athenäum Verlag, 1977), S.

109-131.

- ④ Rouhollah K. Ramazani, *The Foreign Policy of Iran: A Developing Nation in World Affairs 1500—1941* (Charlottesville: Univ. of Virginia, 1966), P. 127.
ただし、議会在召集されたのは1915年11月。
- ⑤ 官僚・ジャーナリスト等から成る党派で、政教分離等の急進的改革を目指していた。
Ervand Abrahamian, *Iran between Two Revolutions* (Princeton: Princeton Univ. Press, 1982), PP. 103-105.
- ⑥ ウラマー・大地主・商人等から成る党派で、漸進的改革を主張していた。
Ibid., PP. 105-107.
- ⑦ Ramazani, op. cit., P. 127.
黒田卓, 「第一次世界大戦末期のイラン民族解放運動についての一考察: Jangal 紙を中心に」『西南アジア研究』24, 1985, P. 86.
- ⑧ 1911年, アメリカ人財政顧問の William Morgan Shuster が強制徴税のために設立した経済憲兵隊が起源で, 立憲革命挫折後は, スウェーデン人将校団に指揮される地方警備隊となっていた。
- ⑨ Māzandarān の大地主で, 元来保守的な人物であったにもかかわらず, 立憲革命の際には革命派の指導者に祭り上げられていた。1909年7月~1910年7月と1911年1月~7月の2度にわたって首相を務めている。
- ⑩ 1847年生れ。Qājār 朝皇族中の名家出身で, 各地の知事を歴任し, 大土地所有者であるのみならず, ヨーロッパへの投資で巨利を得ていた。
- ⑪ この Tehrān 政変に関しては, 近く別稿において論ずる予定である。
- ⑫ Qājār 朝皇族の一員でありながら, Rousseau や Saint-Simon の影響を受けて立憲主義運動に走り, 立憲革命の際にも急進的な改革を主張していた人物。
- ⑬ Tehrān の有力モジタヘの息子で, İstanbul 留学の後, シーア派 イスラーム擁護を掲げる政治団体「秘密協会」(Anjoman-e Makhfi) とウラマーとの調停役として活躍していた人物。
- ⑭ Eṣfahān 出身の有力ウラマー。聖地 Najaf と Karbalā のウラマーの代表。
- ⑮ Ramazani はこの派は科学派 ('Almiye^h) と呼んでいる。
Ramazani, op. cit., P. 129.
- ⑯ 首相経験のある有力政治家の甥で, Ramazani によれば, 独立派 (Independents) なる党派の代表とされているが, この党派の実態は不明である。なお, Abrahamian は, Neẓām al-Saltane^h の代りに, 人民民主党メンバーの1人である Moḥammad Reẓā Mosāvāt の名を挙げている。
loc. cit.
Abrahamian, op. cit., P. 111.
- ⑰ Gehrke, op. cit., I, 199.
- ⑱ Ramazani, op. cit., PP. 129-130.
- ⑲ 立憲革命中, 人民民主党の支持を得て首相に就任したことのある人物で, 1915年8月に第3次内閣を組閣したのちは, ドイツとの秘密軍事同盟締結交渉に尽力するなど, 中

欧同盟国側に好意的態度を示していた。

- ⑳ Ramazani, op. cit., P. 130.
- ㉑ 人民民主党所属のイラン人ジャンダルメリー将校。İstanbul の士官学校留学中に熱
烈な親独派となり、また、極めて有能な将校として定評があった。大戦後の1921年、
Khorāsān で反乱を起して革命政権を樹立したが敗死した。
- ㉒ Ramazani, op. cit., P. 130.
Lenczowski, op. cit., P. 83.
Ducroq, op. cit., P. 186.
- ㉓ *London Times Intelligence File : Persia* (New York : New York Times, n.d.),
vol. 2, 14 Dec. 1915. (以下、Times と略)
- ㉔ 1908年から14年にかけて、モロッコの Fās 領事を務め、大戦勃発後は Baghdād の
軍司令部で勤務していた人物。
- ㉕ Times, 22 Dec. 1915, 24 Dec. 1915.
Ducroq, op. cit., P. 198.
- ㉖ Times, 27 Dec. 1915.
- ㉗ Gehrke による限り、この委員会のメンバーは7人しか挙げられていない。
Gehrke, op. cit., I, 240.
- ㉘ Hamadān 選出代議士。なお、Gehrke によれば、Moḥammad 'Al Khān Klūb と
されている。
loc. cit.
Rezā Qolī Qā'em Maqāmi, *Vaqāye'-e Gharb-e Īrān dar Jang-e Avval-e Jahani*
(Arāk : Chāpkhāneh-ye Arāk, n.d.), P. 107.
- ㉙ Neẓām al-Salṭane^h の息子。
- ㉚ Sāvōjbolāgh 選出代議士。
- ㉛ Ducroq, op. cit., PP. 98-99.
Gehrke, op. cit., II, 334-336.
- ㉜ 1843年生まれ。1883年から1895年の12年間にわたってトルコ陸軍教育制度担当軍事顧
問を務め、トルコの軍事教育をフランス式からドイツ式に改造した人物。大戦勃発後は
Mesopotamia 方面軍総司令官に就任した。Enver Paşa や Mustafa Kemal Paşa を
はじめ、トルコ将校の大半は彼の教え子であったため、トルコ軍当局から絶大な信望を
得ていた。
- ㉝ 現在の Bakhtarān。
- ㉞ Ducroq, op. cit., P. 186.
- ㉟ Lenczowski, op. cit., P. 83.
- ㊱ Times, 29 Dec. 1915.
- ㊲ Lenczowski は、Nezam al-Salṭane^h が、4万の兵を集めると豪語していたにもか
かわらず、4~5,000人しか集められなかったとしているが、条約の規定による徴募予
定兵員数は4,000人である。
Lenczowski, op. cit., P. 83.

- ミクシユ, 前掲書, P. 204.
- ③⑧ Times, 17 Jan. 1916, 24 Jan. 1916.
Lenczowski, op. cit., P. 83.
ミクシユ, 前掲書, PP. 209-210.
- ③⑨ Lenczowski, op. cit., P. 83.
- ④⑩ 現在の Arāk.
- ④① Times, 25 Jan. 1916.
- ④② Times, 28 Feb. 1916, 13 Mar. 1916.
- ④③ Lenczowski, op. cit., PP. 83-84.
- ④④ Times, 13 Mar. 1916, 22 Mar. 1916, 19 Apr. 1916.
- ④⑤ Abrahamian, op. cit., P. 111.
- ④⑥ Lenczowski, op. cit., P. 84.
Times, 13 May 1916.
- ④⑦ Times, 1 May 1916.
ミクシユ, 前掲書, P. 231.
- ④⑧ Lenczowski, op. cit., P. 85.
- ④⑨ Times, 6 Jul. 1916.
- ⑤① Qā'em Maqāmī, op. cit., P. 107.
Lenczowski, op. cit., P. 91.
Gehrke, op. cit., I, 272.
- ⑤② Ducroq・Lenczowski・Gehrke 等は, “ra'is” を president (Präsident) と訳しているが, 共和政宣言がなされたわけではないので, 「大統領」と言う日本語訳は適切ではない。
- ⑤③ Nezām al-Saltāne^h の義弟。
- ⑤④ Khūzestān 選出代議士。
- ⑤⑤ 大戦初期に参謀本部残留代理部政治課長 (Chef der Sektion Politik im Stellvertretenden Generalstab) を務めていた人物。
- ⑤⑥ Lenczowski, op. cit., P. 85.
Ramazani, op. cit., P. 134.
- ⑤⑦ Times, 10 Aug. 1916, 12 Aug. 1916.
ミクシユ, 前掲書, PP. 236-237.
- ⑤⑧ Ramazani, op. cit., P. 124.
Times, 31 Aug. 1916.
- ⑤⑨ Lenczowski, op. cit., P. 85.
- ⑤⑩ オスマン帝国からの独立運動を展開していた Armenia 人は, 協商国軍に協力して戦争に参加していた。
- ⑥① Lenczowski, op. cit., P. 85.
Christopher Sykes, *Wassmuss: The German Lawrence* (London: Longmans, Green and Co., 1936), P. 149.

- ⑥1 Times, 5 Mar. 1917, 9 Mar. 1917, 15 Mar. 1917, 7 Apr. 1917.
 ⑥2 Sykes, op. cit., P. 149.
 ⑥3 Jacob M. Landau, *Pan-Turkism in Turkey: A Study of Irredentism* (London: C. Hurst & Co., 1981), P. 54.
 ⑥4 Lenczowski, op. cit., P. 85.
 ⑥5 Ibid. P. 91.

(関西大学大学院博士課程 XXXXXXXXXX)

〔新刊紹介〕

米 山 俊 直 著

『都市と祭りの人類学』

(1986年4月刊 河出書房新社 1600円)

現代の日本は都市化され、もう村落など存在し得ないと言うことをよく耳にする。近年の研究動向を見ても、〈都市ブーム〉と呼ぶべきものがあるように思われる。このような状況の中で出版された本であるだけに、どのような方法で、どれだけ都市に迫れるかということが評価を左右することになるだろう。都市に対する研究としては、都市自身の分析と都市で繰り広げられる活動に対する分析の二つが考えられよう。本書に於いても、前半で都市自身に就いて考え、後半では都市における祭礼の在り方を考えている。

都市の研究は社会学に於いて多く成されてきたのであるが、本書では人類学によるアプローチの構築が目指されている。従来の都市偏重的研究や村落偏重的研究に反省を促し、都市と村落を一連のものとして見ていかねばならないという立場を表明している。すなわち、村落は都市に対して人を送り出し、逆に都市から村落へ文化が伝えられていくという関係を考慮するならば、都市と村落は切り離し得ないだろう。しかし、その主張に反して本書に於いてはほぼ一貫して都市の有効性に主眼が置かれているため、都市と村落の相互関係がさほど重視されていないのは残念である。

後半は著者の一連の研究である祭礼に関するものである。70年代から著者が調査してきた祇園祭、天神祭、神戸祭の成果をもとに都市における祭礼の意味とその在り方について述べている。夏祭りの起源を都市に求め、祭りこそが都市を運営していくためにも、都市の活性化のためにも必要不可欠なものであると主張し、具体的な祭礼の仕方にもまで言及している。

本書は都市人類学の一方法の提唱とは言えるかもしれないが、何分エッセー集の体裁をとっているため、都市政策論に傾くきらいがある。しかし、学問を生活にどう活し得るかと言うことは、学問を志す者が考えねばならない問題であろう。

(森本 一彦)